

近年、子どもの遊び場の画一化が進んでいることに対して、筆者は自然遊び場を充実させることの必要性について検討してきた。画一化の進行は、遊具の安全性の確保をめざして遊具の改変が進められてきた結果である。しかし、子どもたちは画一的な遊具ではなく、変化のある環境と、自らが関わることにより変化がうみだされる遊び場を求めている。自然遊び場はこれらの課題の解消をめざしており、安全性を保障する自然遊び場が求められていると考えられる。

公園や幼稚園、子ども園などの遊び場では、複合遊具とよばれる、鉄とプラスチック製の画一的な遊具が普及しているが、これらが普及する以前の遊び場に比べて、子どもたちの活発な利用は少なくなってきた。子供のあそび場については、遊戯行動等に着目した分析的な研究は見られてきたものの、自然遊び場については、実際の事例が少ないため、研究としての進展は見られていないのが実状である。その一方で、近年欧州のオランダやドイツ、そしてわが国にも広がりつつある「森の幼稚園」などでは、自然の遊び場を求め、自然環境を遊びの場とする先進的な動きも登場してきている。

本研究では、わが国に独創的な自然遊び場を実現するために、自然遊び場の構成要素とその素材等について検討してゆきたい。森の幼稚園などでの自然遊び場にも目を向け、自然環境での遊び方について検討し、関連する事例の調査を行う。調査対象地は広範な意味での自然遊び場を対象とし、既存の複合遊具の問題点を解消するものとして、鉄とプラスチックに対して、木材、植物、砂、水等の素材を視野に入れて、遊びの要素と共に、地形や自然素材を活用した遊びのあり方から自然遊び場の構成要素を抽出し、そうした空間を実現する方策と課題について考察する。

遊び場の構成要素には、受け皿としての空間のもとに、そこに配される素材があり、さらにこれらを利用する子どもたちの行動がある。子どもたちが遊ぶ行動は、受け皿としての空間のあり方とそこに配された遊具や素材を反映したものとなる。そのため、空間のあり方、素材の検討と行動との関係をとらえ、遊び場の構成要素と素材から新たな自然遊び場の手法を検討する。

自然遊び場の調査結果

事例 1(森と畑の幼稚園いろは): 棚田跡と奥の傾斜地に広がる杉林から構成されている、認可外幼稚園である。当園では川の流れや傾斜をうまく活用している。子どもたちが集まる中央部には、2本の杉の高木の枝から吊るしたロープを活用して、円弧の長い杉の木のブランコを配しており、園児はゆっくりと揺れるこのブランコを長時間楽しんでいる。2本の杉の木の高木の間には登園時に全員が集まって、森の神様に「今日も一日お守りください」とお願いする祠があり、森の中での遊びは、園児らの遊びを精神で牽引している。

園児らは川の上に配された倒木の上を平均台のように渡り、バランス感覚を身につけている。また、40度近くもあ

る、山の急傾斜地を3歳児らが木の根や枝を伝って競って登る。園児らは登攀に際しては、危険と判断した場合には登らず、登り得ることを確認して登り、10m程登ると全員で滑り降りるという行動を行う。本園では、地形の傾斜と植物、川に配した倒木など、自然環境自体が遊ぶ環境となっており、園児らは自らそれを探しだして遊んでいる。

事例 2(長野市森のようちえん): 戸隠高原にある幼稚園で森の中の傾斜地を活用して簡易な滑りの場を造りだしており、特に人工的な遊具は配していない。降雪時にはすべてがソリを活用する場となる。

事例 3(大田区平和の森公園): 同園は都内にある自然遊び場で、起伏のある園内に数十の木製遊具が配されている。基調はアスレチックで、起伏地に木製遊具を連続して配することで、身体能力の向上をめざしている。特に他の遊び場には見られないものとして、水上の遊びがあげられる。板の上に乗りながらロープを伝って向こう岸にたどり着く、円形の木製のボートに乗って池を周遊する等、水の池を活用した遊びが人気を博している。地形と池を活用して、木製遊具を配することで、運動への訴求力を高めている。

事例 4(松本市アルプス公園): 北アルプスを見渡すことのできる高台にあり、急傾斜地を岩場のように擬岩で修景した斜面を10m程も登るエリアは子どもたちに人気である。当園には地形を活用した遊び場と共に、長さ1.8m、φ10cmのゴム製の撓り棒を用いた遊び場があり、この棒にぶら下がって揺らす遊びは、人気が高い。ここでは地形の形状と擬岩造形の活用が効果を発揮しており、可塑性のある人工的な素材で揺れるという原理を発現させるものが用いられている。

事例 5(スヴェール学院小学校): ミズナラとイチョウに囲まれた場に高さ1.2mの石積みと緩傾斜の起伏を配し、周囲には花卉の地被植物を配している。子どもたちは、落ち葉の中に埋もれて遊び、一面に落ち葉と木の実からなる宝の場をつくっている。

まとめ

複合遊具の多くは平坦地に鉄とプラスチックの素材で構成されており、画一的であるのに対して、自然遊び場は土地の形状と深い関係をもつ。事例1と2では、土地の形状と植物や倒木だけで子どもたちが主体的に選択する密度の高い遊びが生みだされている。事例3は、起伏をはじめとした土地の形状を活用して、木材を中心にさまざまな素材の遊具が独創的に配されている。起伏の延長上には、水場を取り込んだ遊びの場が形成されている。事例4は、地形の形状を活用して造形擬岩を配して、相乗的な効果を発揮している事例であり、また、固定的な素材ではなく可塑性のある素材の有用性が確認される。事例5は、植物を中心とした自然の素材をもとに、ストーリーを考案しながら創造的に遊びを創出している例である。自然遊び場は、複合遊具と異なり、地形、水系などの環境と植物などの構成要素と素材が、想像性と創造性の創出に大きな役割を及ぼしていると考えられる。